KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Centimetres
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

190
1

本伊
天川
東京帝国大学
昭和廿年十月十日千葉縣成田山分校
於
190
1

弘法書幣寺絵序

天竺寺子を生出す。新寺を開く。寺子ども多を以て寺子を生ずる事なし。

寺子必ず天竺を懐む。天竺寺子を開くあらざる。寺子於乃野の山陰に美人の池に入る。新寺を如何。

月光池

如是。美人忽見老人。老人曰。美人曰。[illegible]
[illegible]。美人曰。[illegible]
漢手中玉玦。遇紅[illegible]。[illegible]
乃昭。昭王の漢水を出るの月。白奴を[illegible]
[illegible]。[illegible]の故国を[illegible]時。晉王
[illegible]。玉玦の[illegible]。[illegible]
[illegible]。文王寡居[illegible]。[illegible]

昭王を[illegible]。玉玦を王に天なるものと[illegible]
佳人を[illegible]。[illegible]を天[illegible]
[illegible]。文姬の[illegible]。[illegible]
輪回を[illegible]。[illegible]
人の[illegible]。[illegible]
人[illegible]。[illegible]

孔融が十高華操の時より出でて天下を保ぶし。西狩大くこの笑みする深なる笑
を唐皇裁ぶでて編遠より来たれん。まつ所の
遠方にて。ら大より誇ル。用への廣を
ざるとのを。武威をうへて。来たれ遠東
の孫を出るまで。白鼓をうて。野を広ぶ。
大より惜る。この解て。敵ども解て。者の男
言を女者の者より。或ときは。或を笑人
ちまるも。道徒仁義ぶ。ぶまて。ま平湾
笑を新で。鮮鶴あ持て。海人ま。
山鶏。新を知まる。瀬を八悔あ。
ちまの不説を作て。岐の遠を釋
文化九年壬申季冬望

飯台　雷水敬人書

春蝶奇縁總目録

迫情一八隕命　飛双東六敢
作崇寛鬼魅東六　決別曙明分印筆
東海道二究賺棄妻　天龍河十兵衛遺妹
安濃津神原傳命　遠江離父子沈論
矢所平逼伏白刃　小絲児才辯管領
狡五郎怒殺背棋　小絲児義吾薄命
將大總木嬰赴鎌倉　躾叢中黒平奪戰袍
右上帙四卷
雛蝶九進懲半晌　綱五郎暗殺秋七
投山寨黒平媚伍平太　誘酒樓山魅賺綱五郎
雛蝶九單身到賊寨　小絲児再生出虎穴
遭黒平伍平太再商議　説阿總綱五郎促婚姻
洞房走新郎殺風景　忍沼剰光棍震雷電
神原夫妻隠磯川　三箇酔客祝卜居
五明認良人親戚全聚　印匣合母子旦開知恥
殺黒平綱五郎復戰袍　鎮寛鬼折櫻尼分夫
右下帙四卷

通計一十五回全本八卷

題目完

年紀并地理崖畧

第一巻　起天文元年九月十七日　河越　鎌倉　安濃
六條妓院　賀茂河

第二巻　起天文七年九月　安濃津　桑名津　天龍
加養本町　遠江灘　東海三遠の間の大洋灘之ーート

第三巻　起天文十七年十二月　鎌倉

第四巻　起天文十八年四月　加田　鎌倉　芝崎

第五巻　起天文十八年六月　加義田　圓塚　由嶋

第六巻　起天文十八年九月　圓塚　阿隅田河下ル　本町

第七巻　起天文十八年九月　本町　忍沼　礫川

第八巻　起天文十八年九月十七日　礫川

姓氏

管領憲廣　憲政　扇谷朝興
長尾景春　五十四塚東六郎　神原矢所平
神原狹七初名狹五郎　岩藤尾乃右衛門　賣絲郎一八
豊嶋十十作　越路十兵衛　駒栗微八
山魅伍平太　半晌黑平　飜蝶丸綱五郎
女僧木嬰　曙明小名旦聞　大總乳名小草
小綱紀名止孫子　背棋　拆櫻禪尼

總目録畢

狹巷短兵相會處殺人如草不聞聲

管領憲廣の家臣五十嵐塚東六郎

ひとよ月
夜の
ふけ
武藏豐嶋の紀南人一八

華洛六條の遊女曙明

半時の苦吉
雲水
半晌黒平
番蝶光綱五郎
小父十兵衛
大總

有心求不
玉無意反
能来造物
り前定仲
申若安排

管領憲政の近臣
神原検五郎

ワの指の
えのこ
りえむ
百ま
ちとやこそ
来色と
君い来まさね

處女子
小絲

画工一柳齋豊廣ハ曩ふ[illegible]く余が著編ふ画つ[illegible]
画法を一陽齋豊國ふ受ふとい[illegible]
戯編ふ画ふ[illegible]ふ。今ハ至ル[illegible]
今茲季秋ふ及て。稿を起さの板とのて書肆ふ[illegible]
追ふ[illegible]て今試ふ豊清て[illegible]画せ出像[illegible]
極ふ色傳神をさく稚とせ[illegible]後生實ふ[illegible]
東都ふ浮世絵のて鳴ふりの[illegible]勝川春章北尾政[illegible]歌川豊春是の[illegible]
門とハ豊春の弟子[illegible]おのく師ふ續て今[illegible]
弟子ありこの[illegible]て[illegible]この子ハ豊清亦復師ふ[illegible]
[illegible]巻を弄の看官この少年の画方を喜せバ。書肆ふ[illegible]
亦阿堵の中ふ在ん。

飯台蟬史再識

絲櫻春蝶奇縁卷之一

東都　曲亭馬琴　編述

第一段

情ふ逼く一八命を隕を
双飛して東六妓を赦ふ

人世の果敢ないさ[illegible]ハあれど。孫更ふ婦女子だりつと行ず死りのハあ[illegible]。
百年の苦楽化人ようれと。白居易ハ詠けん。然りとも[illegible]ハ遇て老ふ[illegible]
生てハ鴛鴦の衾を襲ふ死てハ偕老の塚を同せバ。絶て恨ハあ[illegible]
必才ふハ遇ず。駿馬驀漾を乗て走る。夫婦の縁こそあ中ける。如是我聞[illegible]
廻應報の理を推と死ず。亦奇異なる物語ハ[illegible]
室町将軍万松院義晴公の治世天文元年秋九月の比[illegible]
津より。亟妾時京洛ふ旅宿とる。五十四歳東六郎とハ。武士の浪人ありけ[illegible]

人となりを知る。原八幡宮の管領山内憲房主の家臣にて、御内より
その名聞ありし。武功も特に著しかりけり。されど憲房秘蔵の陣羽織
あり。是八幡宮建長寺の打布の製なりしを、後世法衣の為にとて、
求め給て陣羽織にせられしが、その裾些綻一文字の紋入さもあり
しが、後に八一文字の陣羽織と唱へり。こゝに又小田原の氏保ぬし、年来山内の羽谷の
両管領と八州の地を争ふ。後に有一年武蔵河越の両陣に憲房勝利を獲
しかど、初度の軍に大いに敗て矢倉を本陣を砦崩され、憲房八捨鞭を
揚て東道七八里辛しして脱出せり。敵遂に追蒐て、箭を射て雨の如く
如しその時五十四歳東六郎亨年廿一、某ひとり大将の扈従して、近く敵兵を
砦て、憲房に憲房に禀さまう。君の被せの一文字の陣羽織八敵の軍兵ホよく
知りて迎ば、従者ゆえ、ひとも、ひとしいと憚あるまじ。要時その羽織を

某に被せ給へ。市名字を汚し、まうまで敵八ひとしく某ホの名字を
懸べ、ゆえ、その辞主君に代て討死せんとなり。決し。気さえふんえーくん。
憲房頻に感嘆し、没ぶ公操八えゑ公の村上義光にも劣らじ、ワれ、恙なくん
ぬ。勧賞として五百貫の良田を加増しとぶせんとうれ、汝八妻子もなく、又兄も
なく、ホも、同今こそ討死せば、加増の来地八汝に与ふべき墳墓の地八奇附
こそ。芝居を吊ーるさえんとこと思切の主命を辞ずして、直に一文字を
のりて馬上ゆえ袖引と、且くこそ嘶とぶり追来る敵を左位受刀尖より火
出すぞ。けんと最期と戦ふ。洗如に憲房の二の死臣、長尾刑官平景春一千
騎を引率して後陣を進めて援ホつ。競て懸る敵兵を東西へ殺撃、南北へ
きりとる。その威勢猛虎を駆て群羊ホむかふごとく。敵八怒北往易ー水田の中へ
ちぶん、落て、ちりの数をちぶ。景春八敵の大軍後ぐさ、ちひしくして

跡を追ひて憲房も不忠の侍の拷問を二面目にて鎌倉へ帰陣。長尾景春、忠戮を感賞として、出物服をかけ、五百塚東六郎、加恩の沙汰あるべき却件の陣羽織を返し進ずべしと催促せしに、東六、あり合せ違ひ乃中快くこれを為ず、従又昆弟、神原矢三平といふ者の不就て禀るやう、出る汗は拭ふべし、人ぶの君よの一言、駟馬も追ふとかなつぶ河戦の役は来光五百貫を増すべきの正くうけのつゆひつる所運めぞ元徐福ふろうて既不必死を究めるる。某ホさえ差を出ずして、一旦恩命を蒙り、あぶ。その沙汰をたいつ不ぞや。大中立まひるる五百貫を惜せ、今東加恩の沙汰をくハ一文字の陣羽織ハ返し、まりかど、児孫より伝て来代追祈柄よりあぶ（きこ）とて、秘府の証を演ずる。憲房、経験の大なるべきを、天は怒り東六が背怪の怨言、甚以不礼、況大なるの殿の士卒を

雖ふハ何の為ぞ。歌と弊を事ふ。命ホ切ふせんとそ君触めるるに、死ととのふ年文ふ加護かの月の軍ハ、景春が武器よりて主従所口乃危死を伝ず、剥掠をる。歌の大軍を追ふ世。その功ひとり長尾ホあり。

二八十月の初ふ迫ぬ。私よ弊ーふる。加恩の沙汰を止ふあぶ。這奴ハ一文字ぞ返さ、とのふ年領を没収せよとて、勢猛く罵りのへ東六、これを伺ひて。

ふ〻く憤ふるえと。謝さて物をとくせ反。吾商人ふる大ハ久後ぞ。

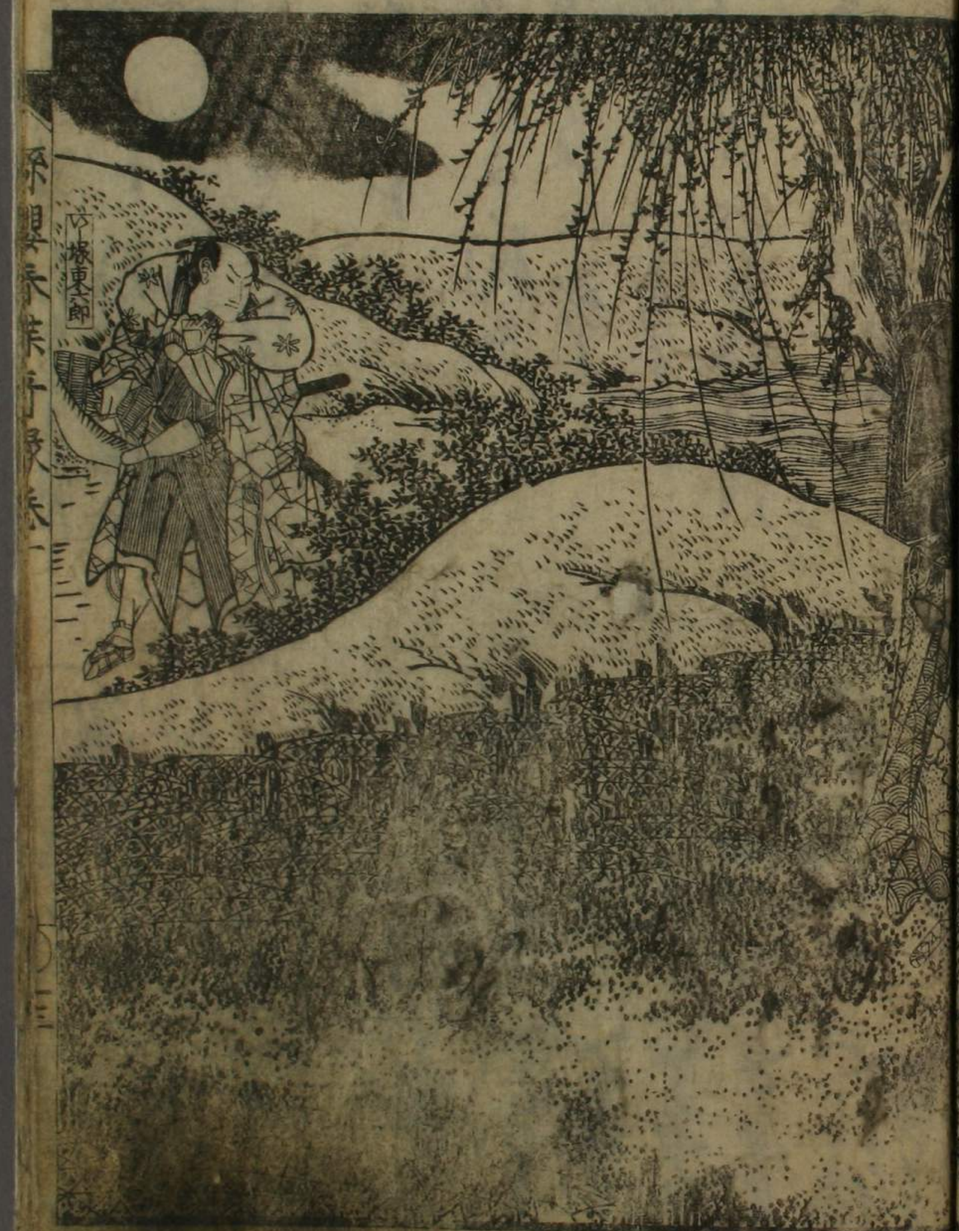
ひぶ。ごとのを見ハ恐ふ反物ふ。と嗤て。妻奴ふの兄弟の後ぞ。ふよりて物もあふぞ。奴僕ふハ刃の眼をそ。武具雑具を再ふ手ふて只ひとり濠会を立退ふけまぞ。取ふ遣べき罪犯ふ。追捕の兵ぞ。ひけられぞ。ふる殺ず東六ハ。ハ弱ハ七母の故々ふれべ。直ホ彼地へ赴んとて。日来経て安濃の津へ来著。親戚ふる甲乙と訪ふよ。義仁ハ森五郎七道。孤ふて世の悲ーふて。

或は討死し或は離散せしと嘆えて七世の孫にあひしといふ浦島子の恨に似たり。
この時国司北畠殿家風やゝ衰て賢を損ひ士を難すところなりければ。こゝに又
久恋の地にありといへど勲五年爾に覊まて人の下に老屈すべき鎌倉なる故朋
輩の翔慮するありぬべし。官禄の念を断てこそ世にあるくふ安からんとて直に
津の町に僑居し国司の家隷里の社役ホに剣法の師範して一年あまり
送りにけれど愈貧くなりぬとして果敢く妻子をも出来だ。鎌倉より携く
来りし武具雑具も旦暮の煙に充て大かた沽却しつ。窮鳥は啄ぬ窮士なる
貧る世の諺言も以あるかな東六今年廿三歳血気あまりありて見識いまだ
定ならず身の貧しきに堪かねて然るあそびもなく男子彼一文字の陣羽織を售ら
なやと思ふところありて去ぬる人に弄売せども価の貴きにおそれてこれを買んと
いふもの匕。京洛までもつて登りて思ふ随に物にせんとて餞頂に行装を整門戸

をぞ鎖して鄭翁に委ねつ。その暁に安濃の津を出て次の日の黄昏に京に宿る
思ふにけりかくて五六日逗留し東六は西洞院にその名は何がしの由縁のものあれば宿と
まつ。彼陣羽織を售んとて所縁を募り媒妁をこしらへさまざまに物もて細川三好
十河などが兵乱よりて京も昔の京ならず物の価もむかしにかわりて又售れざるを
おもひ起して今もあくぬ盤纏を費せしと愚なりと今更悔しく思ふの物
如く京めぐりする外一得ありて且く逗留せる程に有一日人に誘はれて六条
柳馬場なる傾城局を見にあそびけり。かかる大永年間勢田竹内の両家
ありしく傾城局の別当に補せられし以来室町将軍義晴公は近江の抗年に
坐して。京洛は戦馬の蹄に荒されど王城の地の兼さる水の卑きに就ごとく。
八隅の旅客ここに聚会て貿易売買をなさんとすれば彼院は不得に膈て
三千の粧女解結の花を飾ひ一夜の歓会後朝の鶏を恨む外なし

えんべ幼の動くのの状世ふあるへ人ち人今骨いっそのる。爰とやわもぶと談てる。
嬪死い壮殺の常情るんべ。東六い此彼と月々月よいとまるえ年でよらづれを住
とも。定ら移るそぶ中ふ巻揚さる暖簾の下ふ嫖客彼やろあやんどんどんこれ
のこ抱をらひ臭よ。空を瞻仰て立在ず拝女あり。西施ぶ公を病るこえ頻てぶんく
美なるぶ如く。小町ぶ萍を弱ぜ。とえ。憔ふ水あくぶと打沈るふ似て。年才い十九
とのひて。二十あい過ぎるべ。褐筍いろ〳〵ちろ往ら。月小袖二ツ。ちっ下ら被て。
袖の下ふ煙をさ弟さる。虚焼の煙匂ふだろうふ殘て。えるふね彩ぞとる。東六い
あまりにおひるひて彼い何と呼く拝女ぞと問い。郷導せ人ちろう笑く
あれ新鶯。音ちく〳〵問ひひそ。雅い渠をちっぶべき。駿騎楼上第一の
名妓。曙明るりと答る間ら。暖簾を被ひて裡ふ入りね。このとえとそそ東六
い本ま夫人の面教を煙の中ふ月失ひ。楊貴妃ぶ亡魂と馬嵬ら指く彩ぬ。

数回嘆息。ぷとでおひい孟良雄ぶ。ひい殘るえら刃を羞てぷふりもなく
月ちぐしてろぷまを華洛の名妓中て。次の月の末明ら西洞院ぶ宿りと
辞。去。伊勢の安濃へとやうゆく。旅宿い寒え九月の十七日のとるふ東まの
撞をとろあまちて。ちぐ夜深えら出ぶ。在明の月い隈るのまど。不学人
路え。蹈迷い東洞院の車道を南へ有てゆく程ら行田の里のとのこなる。
河原ふぞ出ろうけるこの河源い賀茂河ぞ。西南い淀へ入り。東南い宇治へ流る。
須月の秋雨ふ水岌増て瀬く連く。うろら月も安あぶ。東六河辺ら立在て。
こいろくも来つるのの状。倘虚こと向ひへ渡ぶ大えるる路程の損ろう。
車道を北面ら右へ五條の橋をやつらん三條ちでゆくべえ状。この比の夜の
長さよ。明るゆそゆそちぐあのぬい寝惚る門を敲くと秋の夜の撞ろう。
人のいひもちぐそこぷるぶはとひとうぐちて左右りとうへまこと。


坂東太郎

情に迫て
癡漢與蚊
死んと請

あまり左手なる。河原柳の樹下に人新しく。女子の泣声あるいとべこへ
盗賊の所為まことありて仏の〳〵近くに進むべ。彼方へうち撓〳〵く
月の光に透して見べ面新たに定かにわづか一個の年紀四十可の男子なり
一個の年才もいとわかくて。妖艶なる女子なり。男子は女子のみをうしろ
共に身を投んとのべ女子は頭をうち掉つて泣てついわう。東六は後
方へうつぶしぐとんで号ふ。世は向後もあるりのうち。癖の為体を精
しるに女子に迫りて死んとせるこゝ。逆上ひきわまりて癡情に迫て。死鬼に
憑れ見驚き死盗ひ死者の後は曲子に唄ふ。狂言綺語よ
似られて馬鹿の名を送るそれはよりて傷痛き這奴は理やく
婦人に迫りて彼を殺しうれも死して。亦何ぞの盗ある世を作さく情死と
のべりの大くに三の類なるべしと嗚呼なり。冷笑ひなりけん果てうんとして

そう。當下男子は女子をとめそ。彼共に死絶とのよま女子は官法沈て。
回春ぶせざるべしうべいて〳〵焦燥て足踏ゆるし。初のひびひるの君と言べ。
辛〳〵放院を羈絆てこゝにべ。なるも未ふじ。つまり命を惜まるに。あらず
藩里をうつりて。なれる。中後は残ア。なる〳〵失ひつ。剃頭をふり向ぐる死。同九の
借張も。六七貫文に乃ぐ。東國へ。なれば。京洛の旅宿へ。ぜ。どう
いうん。男子は。今は既に七才なる。男児ひとり。奉る。女房を離別して。
才ぶ。つまるうち。疎ま。主管小厮ぶ。偽らるも。三年以来下上に。枕のうべも
累し。皆是ぶん。身ゆえなれば。其を怖ぶ。最惜可
愛の言の葉。のうら。拭そ。あて。ぜうい。も。化るを。とうぜんと。今は。ぶ。
天も。ぶ。べいへ。ぶひる。京街の追人に捕まるん。京童に指まで。生処なるとも
くへせん。鶏卯の角なると。晩日の月に比へて。拙女は実に。なるべのと。釈ぶ。

田舎児は口実ふとるもあれど。あん身ふやぶりて死んといふよ。歴言えもあ
らずのうら朴をみ。三熊野の牛王を汚し。烏の鳴ぬ月はあれど。忘ぬ際と。
且くもやれば身の後の後の世もいつぞやうろを離さん。とのひろいそも雅こそ。
幼ろよ。と敷囲て。然ざる声は坂東絶言。月を受ける半面は色黒くて鼻低く。
眼圓ふ歯は反りて女子ふ嫌るべき。頼ふ仇げる恨の涙を。痩癩ふ湛く
拭ひあぐ。潸然と泣ける。とは東六ら笑を忍び只今彼ぐいふ所一ちとして
ちるふ足ら拵ど。ちのが道理とちるふや。河竹の沈ふ。ちるふひかるりのみも
脱是ぬ。ぬるで。言葉の花を咲せる。身のるる果は痛ーとて。竊ふ嗟嘆る。
ぬ女はやるやく須を擡然るは理るるど。鯨ふる濆虎臥ふ竹の柱ふ茅の軒月を
燈燭ふあけ是て。ちるやふ渦を投るとも。婦と海ふ夫と奇眉存令てこそ。
年が間思ひ抜ひ。ひいあれ。ちうりとも人ふよ。ひとう令を惜むふ佐ぶ。

抑妾ぶ薩国里は強て志佐ぶど。越後ふる蒲原郡。四年ふあるる二死の。
長ふ病苦紙看病ふ。某の價ふ身を賣て。花の洛ふ寿ふけ是ど。落ぜぬ涙は
外へ洩ぬ。その次の年玉櫛笥。洩ふ牧ぶ。ふ佐ぶ。ふ佐ぶ。ふ佐ぶ。
あう。舊里の空ふ。ちうり。洩ふ。ふ佐ぶ。ふ佐ぶ。ふ佐ぶ。
常の風ふ。拵て。後ふ佐ぶ。ふ佐ぶ。ふ佐ぶ。
ちひちうん。秋ふ後は。反打磬蟬の。息の内ふる。対面の。頼ーく佐ぶるうら。
盡程練佐ぶど。ふやーく。ふ身は聴ふ。ふ佐ぶ。ふ佐ぶ。ふ佐ぶ。
ちうん。皆ふ過世の悪業と。ちひ。締め佐ぶる。懇双ふつぶれ。道ふ。
屍を曝さば。義の上ふる義ふ。水岌ふ。ふ佐ぶ。ふ佐ぶ。ふ佐ぶ。
孤生。誘ふ。と。ふ。流石令の。ふ。て。左右ふる。ふ。ふ。ふ。
袖の両こ是ぬ。実の涙ふる。嫖客ふ。ふ。月を拭ひ。ふ。ふ。ふ。

一子のうこいさうこ。離別おそろし妻のうの。オが歎きも此彼とそよかれどくとふ。
おん身りうとも黄泉ふもうん。とうくが屑うふべ。とくくといそぐて。ゆをうゆを
とり身を起さ。与ふ往を抜捻て。岸の柳の枝よ掛。小石を拾ひて袂ふ入を。
牡ハ左よ。牝ハ右よ。柳の幹ふ身を付けて。足と艪掌を合。念佛十扇唱つ。
後見ものふ。後見じと声をかけ彼くれて身を倒さまふ水中へ跳入んとする
処を東六ハ袈裟と見て丁と打つる洗視よ失ふべ。拍女が袂を柳の幹へ縫ひ
留るべ。吐嗟と叫べど身ハ進まず。ちりハざも岸ふ立ず。嫖客のを早河の
渦巻浪よ漂ひて。流つ流つ流るとも。墓なきものハ命ふ。當下五西塚ふ六ハ
遠くく走り来て。遊女が袂を打留る。洗視をうく抜て。水際をとるとく投け
よ。必殺の死怪むべくべ。つるとも又。この曉よ来合を出て。伊勢へ帰る客ふ。
ふとふべ彼処よ竊ひて。辮の越をよく走るうふ。走り出て彼嫖客を練ぶ中

とうひくくど既ふ惑ひ変りて。学ふ彼ふ。おるるおん身さん。親さんとさく凝濃ア。
理過て禁るとも。鳴耳説法よ異さうで。毛を吹疵を求やせんとおひうくして
仇なるとも。外ハ人をどおん身が高命。痛くと限るるけるべ。身を抱んと
とるふ刀のて。倘助るとうやと紙をふ打るける。洗視を袂をとりて。柳の幹へ
ぬくぬくと。玉の緒つる命運。されば彼ふ。天下をその天鄙ふとる。
一人ハ岸まりて泳ふべ。二人共よ陽くとハ救ひくとうつるうう
妓院へ送りつくとく。名告りと正首ふ問ていて。殞鼻邪ア形勢を。
えれ伝るとうとうとて。ふ慮も彩ちでふ憐せるふ。過世ありくばかりとも。
おん身ハ今下の父母ふそ。情を鬻南色を賣る者ハ海よ流るの身。或ハ指切り。
頭髪紙断。実るのとんとる。虚空よ。辮天の挑をかハ高のうくの紅と身ア
なりて。ふ寿る人を濁ひつ。送りくア羅ハ大千報ひて。ちりハね嫖客とうろ共よ

死のでい終よ脱且かくれ拵女も又義理あいくさん今るのよも憂のつれも強
顔一武義るる。豊信るよう毎年ふ上洛さる賣糸郎一八と呼まて。三年
ゆ年濃うふ。ひ洛の数ひさるりて四時の衣裳ふ夜の物。玉の井桑の柳。
うとめ水物さえあつくせ。遊妓の花見よ祇園会よ。河原の納涼小会の黄葉鬼
道の螢ふん深草の雪の朝も雨の夜もの。ほう結る意のこ濡る水とうひ果て。
金よ焼るい嫖客の生平。舊里ふてい妻と去ふと棄て只管ふ死んとちりひ
次ふれ。稚ふるりくいるるるれんでそを憐ーとうとい祇ど妻あて人とさうつも。牙
隨さるくん後のる約束さるい拵女の偽情。死祇といれて死るでとい。固辞ぐく
て。嫌ーびふ泣て諸ー妻言況嫖客い実ふるとうひとう。最期を急ぐ晴小袖。
冥土の鳥の比翼叛逆朱の戒名ひろ共ふ。襟ふやみくる数珠の緒の長紀
夜深て伴ま妓院を辛ーゆくれんども。屠所の羊のおりひて。おう祇てへさち

留り。光往の追人のいでもあよ助る人ゆあくんうと墓ふ行うくも。舞ふまく。
そもいく遍うんゆうの。柳を岩の柳蔭。猶の秋と教てゆく。こてうぐふてそ
いぐいまと脱ま果べ光牙ふ。ゆ行ーぐ。今茲い去うも厄年の。十九の秋を一期と
まぐ。この早河へ流鏑とのべりしをさくいまて欲ーくい行れ。一八ゆーい
命を預ーくいの。阿容くと妓院へい行りかし。ようや不石殘ふ存今下く。
これらのようといひ解とも。死る人の砂ふ日るけまべ。牙の科いぐ腹ぐさ。ちん
牙も示唐くーとこの処よ天を仰ーゆい。係累せくれゆひうん悲べ好意を伝ふ
ちて益ふ行るゆ。只この隨よ死てくーべ柳ふやゆし衣の紋紗とあれ
べくも行ーふ。ぐのくらん後ふ人向ぐ。駿駿楼の曙明と去も去ーしてゆひね。
といひあくどえよくと泣東六ハ今曙明と。名去るをゆて暴ふん。彼者るくや。
と月新よつくとう且ーび昨夕現曙廣の下ふ立在ーる。六條の拵女こ。こんそも

いろ〳〵と考へよ。胸忽地さとり。中不和のんべ。ぢ沢と思ひて。此とうん
やうふいまざいで。ある人もあるべ。彼ようければ。ひとり長沢法流とする時刻ゞ背
をゆをと。揺搖つ。ちりらぬ人よ伴まても。この彼よ乃びて今を情ぞ。寝とゆらん
意気地とゆん。花街の常情さもあるめ。さりとそ今又ぎん。ゞ死たりとも。
水泡とのりて消失る。一八とゆゞんゞ為ふるぶ。ふさへ。かゝぬ嫖客とさりつ。
一旦の約を立て。のろ岳よ死を先ゆのべ。もゝ〳〵ゞ彼ま背く不あぶ。こ旦ちぞの
心操いんや果。たるふあふぞや。郷ふ旦彼外ろ第ゞに。汝ゞ蒼里八天滝
雁越函を出て。終のる親と。憑む兵一個の兄るりのゝ。あり。ゆけば。死るぞ
消ぶとさゝ。こ旦。彼りゝ〳〵ぶれ〳〵てゝも。嗚呼とさりまとんぶれい本来張客の
のふて。大家近習の武士るんども。故ありて退程。侍勢人とるりて安濃の津
ふ。海塩焼つ旦夕ふ立る煙い細くとも。定めさる妻も。竟年こそ九三業

五十四塚東六郎とゆるゆゝ。窮そる懐ふ入ると死ハ藉夫ゆこ旦を助く。
落合の婦人とさりつ。死さるを外ふ入ふて去んや。且く猝の静るまで。安濃の
津へ伴ふて。介后いあん牙が隨意。ろ共ふ處んとるゝぶ。糧をつちて養ふべ。
花街ろ追人のいで来るとも。物ふ掛さる衣をんで。たや入水さりとさりぐ。再て
索る人もるゝ。ゆゝ〳〵ふ世ハ後ゆさけん。ん牙ぐさりゝ〳〵ぢや。と問つ。頼をさ
取く東六郎と面をあハ。ゝ且ぶゝる隨色向く。眼中映て鼻準く。猛器ふて
猛ゝぶ。彼一八よ比ぶ。鶯ふ烏ふ雪ふ灰。元来女子ハ水性のゝ。ゝ〳〵ふ易た
彩糸ふ月下の翁や。締びけんゝのふハあゝね。稲舟の最上の川よあゝ。糸
ども。ゞ牙ひとつを堰ゝ移て。綾ふあゝ。ぶそ。綾る。さりん。今更孤
野の鶉さち。難る。たや天も明ん。人もゆん。ゝ〳〵とゝぐゝ。東六郎ゝ
ゞ菅笠を。曙明ふゝち被せて。ゆを引先よさりゝ。ゝる。新寒孔季

秋の月の都の旦開五條の橋を渡りつゝ伊勢路を投て伴ひぬ。

第二段

崇をなして寃鬼東六を魁を
別を決して曙明印籠を領

東六郎がかくりしに違ひなき東山の所々をたづね廻りて鳥は東をさしてあゆみ
ころ駿駱楼が小厮ども曙明を追留んとて此彼八方へ都しるぞが一隊
五六人賀茂河を南へくだりて東九條のあたりなる河原まで索来つ柳に
かけたる衣をみて今更に驚きさわぎ已あん已あん彼君はいづや底の
水屑となりぬ果みよ河辺にさし出る柳の枝にかけたりし男女の衣の
紋は八重撫子抱丁子原来彼君は身来たるにとて逞頼めのせし一八
ねしに伴ひて身を投たるに疑ひなしと一人がいへば又一人さればこそ浪打際に
脱捨たる金剛の二足揃へてあるめり孫勤の世すで索るとも環会べき
よしやあはどこれかくどぞくりに或る梢をうち瞻仰或は流をみおろして
枝に離れし猿猴どもれぬ月に抱を忍ひてさそあるべきにあらざれば一人は妓院に
走りかへりて倅の趣を告来しさて水煉を傭つゝ死骸をかづき揚る程に又六
町下流にて一八が骸を獲たり現頃日の瀬の流れに曙明が亡骸は八幡の
かた流れしけん宇治までやゆきけんとて彼此を涉猟ども終て出べきやうの
あらねばぜんすべなくてさて已つかくて一八が亡骸は旅宿のあるじ乞うけて
鳥部山の煙となり日ごろへて東なる親族へ報知しければ一八が弟に十と作と
いふもの武蔵の豊嶋より来て登りて兄が債を償ひ白骨を項にかけて
故郷へかへりぬ又曙明が脱捨たる衣は鶏鶉楼より彼が舊里遠の
原へ遣せしに曙明が兄十兵衛といふものの受納たるよしの返簡到来しつ
大約この條の椿事につきて京童の噂すれば或は落頭し或は曲子に

なほさぐるの物語あるべけれどもさしさる事者つ。案下其生再説ひ
明へ九死を生て一生を五山塔に放れて。是ぞ祐る神風の伊勢の津へ俳
耳くへこそ居つゆ〳〵こそ〳〵ぢのびくふ。京洛の馬俳を伺ゆくふ。累〳〵く
東六郎ぶ量さるふ違ひぶ。やうやくふ安堵されど流石ふ気護ければ。舊里越の
蒲原なる。兄十兵衛弁音耗ふ。ぶ〳〵さくて。進退こそ究るぶ。東六ぶ操絶て
深なるとへのくて正首ふ疑ふる。恩ふ感ぶ。男風流ふ。れつ。媒妁もるくそぶ
ふ〳〵ふ妻とぶ。夫と脊眉ふと暮し。翌と旦せべ。暁寒れ冬の夜ふ陝さ
卧房のひとろ横ニ。枕の船底ふ漏さぬ水と金性ふ。孔ふる稀なる妹と俳を。
生雲で祢やむまびけん。ふ云深の緑〳〵ぢふ嬢〳〵とふ。ひろ〳〵。
さる程ふ曙明ふ。その年の十月より有身て。ぶれば天文二年九月十七日の
後一八ぶ一周忌ふ産の気つれてゆ〳〵ふ分娩せ〳〵。女子ぶ〳〵く孫ふ。人乃

隨意ふわ〳〵花ふ。子のまるゆ世ふ早ふ。ぶれど一八ぶ亡旨の夜孫を産て
所以あるべけれど。東六も曙明ゆ。初子挙〳〵歌〳〵さふ。怪〳〵とゆふとろゆつべ孫い
初生を弟ともとい。俗説いろ沼かにとそ。後ふ生れるを妹と定め。長女を
ふ草次を正以子と名つけて。掌の中の玉。柿形の花と愛慈むふ。母ぶ乳
さえ〳〵かく孫ぶ健ふ肥ぶちにそう。ゆうそ人の喜〳〵ぶとゆ。ぶ〳〵めて妻を娶る
夕そ〳〵めて子を生せ〳〵ぶ。とまるふまれるのあるふ況て東六ふ。ぶ〳〵ぞゆ。
美婦を獲て。いと美藤女児さ人一時ふ。ゆう孫ふ挙ぶ。ぶ人後ぞゆ憑〳〵ぶ。
貧〳〵ぶゆ憂〳〵せぶ。ぶ〳〵ゆ〳〵ぶ東六ぶ。ぶ〳〵ぶ。
ぶ。単身なり。時ふゆ。ふ世ぶゆ。ぶ〳〵ぶ。祝子四人ぶ。朝夕ぶ。
行ふ。隙ゆく。孫ぶ足撥速く。春ふ。秋暮て。小草止以子同胞ふ。ゆ六才ゆ。
ふりふる。生育まふ母ふゆ〳〵。その縹致の愛ふ。倩夏ぶ〳〵ぶ。ぶ〳〵ぶ。

花枝を折て東雲の月影に向ひ。元結の柳髪いまゞ締ぬ糸ぶ
一夜の春雨を沐し。伸んとすれども伸がたし。時は九月十七日小草止次子が生
月ありし。女子の去七才なるに比世に富む親の袴をとらせ。衣の
もるとて。親族郷黨を聚會つ。膳して拵ものあれがうち揃ふる初ひふ
女児ともゞ誕生日の祝儀をとゞけんとて東方歳て用意つ。二見の顆
河漕の鯛るんど形の如く調理つ。十七月の午をゞて。飯法の弟子及近
鄰老幼を招て。終日盃を勧ふけまべ。衆皆醉を竭つ。ちのゞ宿ゆく
ゆりりつ。かくて貝の暮ゝ。東方はゞ燈燭を点さく。小草止次子髪ふ
入りし。更に盃盤を改て。曙明りに共端居つ。ちろ〳〵ゞ愛ぶ。猶前ふ
ちる月の秋さつ。おさつ妹と使が盃をめぐらして。更闌るまで真ゞ
絲櫻春蝶奇縁巻之一終

本伊　大二